

韻母から見たチノ語音韻史

林 範彦

0 はじめに

チノ語は中国雲南省西雙版納^{シーサンパンナタイ}族自治州景洪市基諾郷^{ジンホン チノ}および補遠^{ブエーン}山地区に居住するチノ族の話す言語である。話者数は約2万人存在し、方言に大きく^{ヨウラク}悠楽方言と補遠方言の2種類存在する。本論文では筆者の採集した悠楽方言^{バカー}巴卡土語のデータを扱う^{注1注2}。

チノ語はチベット＝ビルマ語派^{ロロ}＝ビルマ語支に属している。さらなる下位語群の所属については先行研究において^{ロロ}ロロ語群と考えられている(蓋1986, 西田1989, Thurgood 1989など)。しかし、さまざまな側面において^{ロロ}ロロ＝ビルマ諸語(以下LB諸語)の中間的な特徴を示す部分も見られるため、本論文におい

^{注1} 本論文で扱うデータは筆者が主に2001年7-8月、2003年8-9月に中国雲南省西雙版納^{シーサンパンナタイ}族自治州景洪市基諾郷において調査したものである。筆者の執拗な調査に辛抱強く答えて頂いたチノ族である王阿珍さん(1980年生まれ)にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。また2001年の調査は文部科学省特定領域研究(A)「環太平洋のく消滅に瀕した言語>にかんする緊急調査研究」(領域代表者 宮岡伯人)の援助を、2003年の調査は平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げます。

なお、本論文を執筆するに当たり藪司郎教授(大阪外国語大学)ほか京都大学大学院の院生諸氏からも多くの教えを頂いた。心からの感謝を申し上げます。また本論文は林(2002a)の一部に加筆・改訂を行ったものであることをお断りしておく。

^{注2} [チノ語の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音]/p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, tɕ, tɕh; m, m̥, n, n̥, ŋ, ŋ̥; l, l̥; f, v, s, z, ʃ, r, ɕ, j, x, ɣ, (w)/, [母音]/i, e, ø, ε, œ, a, ə, ɔ, ɤ, o, u, u̯である。声調素は/55, 44, 33, 35, 42/である。チノ語のみならず、ここに挙げているすべての言語の音節構造は頭子音＋介音＋主母音＋末子音/声調で構成される。本論文では頭子音＋介音を「声母」と呼び、主母音＋末子音を「韻母」と呼ぶことにする。本文中で末子音のことを「韻尾」と呼ぶことがある。ロロ系では末子音がないことが特徴的である。チノ語もLB同源語では末子音がないが、漢語・傣語からの借用語では鼻音が末尾にくることもある。音韻に関する詳細は林(2002a)を参照されたい。

ては明言を避けたい。

チノ語の記述における先行研究は蓋 (1981) および蓋 (1986) がある。蓋 (1981) はチノ語の最初の報告となるが、その後の蓋 (1986) がより信頼のおける資料として、LB 諸語比較研究などで参考にされてきた。たしかにチノ語の実情をはじめて映し出した研究として重要であるが、いまだ不十分な部分も少なくない。またこれら以降の記述研究はほとんど出てきていない^{注3}。

チノ語の単母音の韻母は 12 個存在する。一般に LB 諸語は 10~20 前後の単母音の韻母を持っているが、その体系は緊喉母音と非緊喉母音の対をなしている場合が基本的である。すなわち多くの LB 諸語の単母音韻母は同種の母音が 2 対立をなしているということである (黄 1992 などを参照)。

チノ語には林 (2002a, 2002c) などで述べたように、音韻体系に緊喉母音を持たない。そのかわり対立する非緊喉母音の種類が他の LB 諸語よりも多い。本論文ではチノ語の単母音韻母の変化を、LB 諸語との比較から考察していく。結論としては主に、(i) ロロ = ビルマ祖形 (以下 PLB 形) において開音節であるものは、*-a を除き、チノ語を含め LB 諸語全体を通じて同種の母音として反映していること、(ii) PLB 形において入声韻母^{注4}であるものは、チノ語とロロ系 (特にロロ語) の主母音が同種類の母音であり (ただしその場合、ロロ系では緊喉母音である)、末子音を失っていること、(iii) PLB 形において鼻音韻尾をもつものはチノ語はロロ系とも異なる種類の母音となること、(iv) 傣語などからの借用語は同種類の母音としてチノ語に導入されていること、などを示す。

本論文の構成は以下のとおりである。まず 1 で、LB 諸語の韻母の形式を紹介し、本論文における PLB 形の再構の手続きを述べる。そして 2 で、現代のチノ語の韻母を軸に、LB 諸語と比較しながら、PLB の韻母からの変化を考察する。また 3 では傣語からの言語接触も考慮する。4 で、まとめ、今後の展望を述べる。

1 LB 諸語の韻母と PLB 形の再構の手続き

この節では LB 諸語の韻母はどのような形式をとっているかを紹介し、本論文で取る PLB 形の再構における手続きについて述べる。

まず韻母において、PLB からロロ系とビルマ系への変遷を考えると、祖形で単純母音であったものも子音の韻尾をもつものも、ロロ系では一律に単純母音化が

^{注3} より正確には蓋 (1987) と雲南省地方誌編纂委員会 (1998) があるが、前者は主に文末助詞について記述し、後者は蓋 (1981) と同程度の簡単な紹介を行うにとどまっている。

^{注4} 破裂音が末子音に来ている韻母のこと。

進み、ビルマ系ではそのまま保存している傾向がある。

PLB.	ロロ系	ビルマ系
(1) *CV#	CV#	CV#
*CVC#	CV#	CVC#

ただし、ロロ系とビルマ系を分ける基準を韻母のみに求めることはできない。たとえば、ハニ語の方言やサンコン語^{注5}などは韻母に鼻音韻尾を持つが、ロロ系に属するとされている。

韻母の祖形に関しては、Burling (1967)^{注6}, Matisoff (1972), Bradley (1979), 李 (2000), Matisoff (2003) などがそれぞれ独自に立てている^{注7}。チノ語など中国で最近になって「新発見」された言語を扱っているものとしては、李 (2000) や Matisoff (2003) がもっとも説得力がありそうだ。しかし李 (2000) は、例語を羅列したのみで、変遷過程が見えてこない。また入声韻母の主母音に長短を認めるなど、きわめて不自然な再構法をとっており、筆者としては疑問を感じる点が多い^{注8}。また Matisoff (2003) は現在最も新しい研究成果として注目に値するが、基本的にはチベット = ビルマ祖語の再構を目指している。しかし PLB に関して言及する部分も多く、本論文の該当部分でも参考にしていく。

以上のような数多くの先行研究を参考にはするが、ここでは筆者が具体的な例語を通じて、帰納した PLB 形をもとに考察を進めていきたい。その再構の手続きは基本的に林 (2002a) で論じた方法に従うが、本論文でも述べておこう。

^{注5} サンコン語は最近になって中国で資料が公開された言語である。李 (1992) に詳しいが、ロロ系であると考えられているようである。また最近中国で「発見」されたロロ系の言語も末子音を有しているようだが、詳細な調査報告はまだ発表されていないようだ(藪直談)。

^{注6} Burling (1967) は PLB 形の再構を試みた最も早い研究として評価すべきであるが、ビルマ文語などを重視しないで再構した点でかなり問題がある。

^{注7} Bradley (1983) もチノ語の音を他のロロ系諸語などと比較しているが、蓋 (1981) のいまだ整理がついていない資料 (例えば韻母に-y を認めているなど) を用いているため、参考にできない。

^{注8} このほかにも中国における最近の成果として呉 (2002) があげられる。呉 (2002) はチベット = ビルマ諸語に限らず、トン = タイ諸語などを含めたシナ = チベット語族全体の同源語に関して広く取り扱っている。チベット = ビルマ語派においてはビルマ祖語やカチン祖語なども独自に再構しているが、明確な根拠が示されていないことが多い。PLB の韻母についてもチベット語の韻尾を参考にして思われるものが多く、本論文の基本的に LB 諸語内のみを参考にして PLB 形を再構するという態度と異なる。

声母・韻母のいずれも LB 諸語全体を見通しておかなければならないが、声母・韻母で再構に際する参考言語が異なる。

まず、声母に関してはロロ系を参考にする。その理由は、破裂音・破擦音声母で有声音・無声音の対立を残している言語群だからである。ビルマ系はその対立を失い、無声音の無気音・有気音の対立に変化したと考えられる。ロロ語あるいはハニ語で有声音があるセットでは、祖形にも有声音を立てるのが妥当である。

韻母に関してはビルマ系を参考にする。その理由は、韻母に末子音を残存している言語群だからである。ロロ系はその末子音を摩滅させたと考えられる。韻母の再構においてビルマ文語^{注9}(あるいは古代ビルマ語^{注10})を最も有力なデータと見る。ただしビルマ文語に合わず、チノ語をはじめとする開音節主体の言語に祖形として閉音節を再構する場合、ロンウオー語(マル語)などビルマ系諸語の末子音をもとに考えている^{注11}。

なお、本論文では基本的に韻母の再構について見ていく。必要な場合のみ、声母の再構形を提示する。また声調の再構は行わず、今後の課題としておく。

2 チノ語の韻母の変遷

この節ではチノ語の韻母を中心に、他の LB 諸語との比較によって再構した PLB 形からの変遷を考察したい。2.1, 2.2 では LB 諸語において通時的に同源であると考えられるもののみを取り扱う。すなわち、チノ語では単母音の韻母のみがそれに対応する。チノ語において -n, -ŋ の鼻音韻尾があるすべての韻母、およ

^{注9} ビルマ文語の表記は様々にあるが、本論文では西田(1972)および藪(1982)で採られている方法に従う。

^{注10} ビルマ語史において最も古い史料は1112年に建立されたミヤゼディ(Myazedi)碑文である。これはビルマ語のみならず、タライン語(モン語)、パーリ語、ピュー語の4言語が直方体の側面に刻まれている。それぞれ同内容であることから、ビルマ史における「ロゼッタ・ストーン」的役割を果たした。これに刻まれた当時のビルマ語を本論文では「古代ビルマ語(Old Burmese, OB)」と呼ぶ。

ミヤゼディ碑文におけるビルマ語面の言語学的研究はDuroiselle(1919)に始まるが、日本においても西田(1955, 1956)がある。西田はミヤゼディ碑文に刻まれた言語を「中古ビルマ語」と呼んでいる。またこのほかに古代ビルマ語の音韻論的研究にはNishi(1999)などがある。

^{注11} ただし注意しなければならないのは、ロンウオー語において末子音がある場合でも、ロンウオー語内の変化で生じたものである可能性もあることである(Burling 1966)。よってロンウオー語で末子音があっても、他言語でそれが存在しない場合は祖形に末子音を想定してはならない。

び二重母音のあるほとんど^{注12}の韻母は漢語・傣語からの借用語である。これらは3で取り扱うため、ここでは取り扱わない。

2.1 では基本的な対応関係から導き出せる変遷過程を考え、2.2 では2.1 で述べなかった一見特殊な例を考察していく。2.3 でそれらを表にしてまとめる。

2.1 基本的な変化

それでは以下に基本的な変化であると考えられるものを、チノ語の韻母別に見ていこう。

2.1.1 チノ語 韻母-i

[PLB. *-i > J. -i]

- (2) a. mi⁵⁵(「火」; *H. mi*³¹*dza*³¹; *L. mu*²¹*tu*⁵⁵; †*Lis. a*⁵⁵*to*⁵⁵; †*Ac. poi*³¹; *Lw. mji*³⁵; *Las. mji*³³; *At. mji*²¹; †*C. η*⁵⁵*pui*³¹; *WB. mii*²; *Bs. bi*tho(329); *ZM18*)
 b. to⁵⁵mi⁵⁵(「尻尾」; *H. do*³¹*mi*³¹; *L. (巍) ?me*²¹*phE*²¹; *Lis. a*⁵⁵*mo*³¹; †*Ac. t̪hi*³¹*ŋaŋ*³⁵; *Lw. ʃ*³⁵*mji*³¹; *Las. ʃ*⁵⁵*mji*³³; *At. ʃ*²¹*mji*²¹; *C. ŋi*³¹*t̪ʂo*³¹; *WB. a*³*mrii*²; *Bs. t̪ŋhni*(84); *ZM267*)

[PLB. *-iy > J. -i]

- (3) a. a³³li⁵⁵(「重い」; †*H. ɛ*³³; *L. (武) li*³³; *Lis. li*³¹; *Ac. li*³¹; *Lw. la*³⁵; *Las. la:*³³; *At. lai*²¹; *C. lai*³¹; *WB. lei*²⁻; †*Bs. ?aŋhan*(564); *ZM1014*)
 b. li⁵⁵(「4」; †*H. (墨) li*³¹; *L. (南) li*³³; *Lis. li*³³; †*Ac. mi*³¹; †*Lw. pjik*³¹; †*Las. mei*³³; †*At. mji*²¹; †*C. mi*⁵⁵; *WB. lei*²; †*Bs. si*(481D); *ZM800*)
 c. ji³³t̪ho⁵⁵(「水」; *H. u*⁵⁵*t̪u*³¹; *L. z̪i*³³; *Lis. e*³³*d̪z̪e*³³; †*Ac. ti*⁵⁵; *Lw. yək*³¹; *Las. kjei*³¹; †*At. vui*⁵¹; †*C. ti*⁵⁵; *WB. rei*; †*Bs. lán*(336); *ZM47*)

[PLB. *-uy > J. -i]

- (4) khi⁵⁵(「汗」; *H. (墨) khu*³¹*fy*⁵⁵; *L. (南) ke*⁵⁵; *Lis. t̪i*⁵⁵*z̪i*³³; *Ac. a*³¹*xə*³⁵; *Lw. pau*³¹*kj̥*³⁵; *Las. pei*³¹*ky*⁵⁵; †*At. pui*⁵¹*pu*⁵¹; *C. —*; *WB. khywei*²; †*Bs. m̄d̄ŋhn̄u*(151); *ZM154*)

^{注12} 若干の語彙を除いてほぼ漢語・西雙版納/傣語からの借用語であると考えてよい。固有語と考えられるものには以下のような語彙がある。

(i) khao⁴²「何」、lai⁵⁵「～人」など。詳細は注38で述べる。

[PLB. *-it > J. -i]

- (5) a. thi⁵⁵(「1」); *H.* (墨) thi³¹; *L.* (南) thi²¹; *Lis.* thi³¹; *Ac.* ta³¹; *Lw.* ta³¹; *Las.* ta³¹; †*At.* ʒa²¹/lä²¹; *C.* ta³¹; *WB.* tac; *Bs.* †nùŋ/tù/thù(478); ZM797
b. ñi⁵⁵(「2」); *H.* ñi³¹; *L.* ñi²¹; *Lis.* ñi³¹; †*Ac.* sək⁵⁵; †*Lw.* ʃik⁵⁵; †*Las.* ək⁵⁵; †*At.* i⁵⁵; †*C.* svk⁵⁵; *WB.* hnac; *Bs.* ni/ †sōŋ(479); ZM798

[PLB. *-ik > J. -i]

- (6) a³³ʃi⁵⁵(「新しい」); *H.* ʃi³¹; *L.* (武) ʃi⁵⁵; *Lis.* ʃi³¹; *Ac.* ʃək⁵⁵; *Lw.* ʃək⁵⁵; *Las.* sə:k⁵⁵; *At.* a²¹sik⁵⁵; *C.* ʃuk⁵⁵; *WB.* sac-; *Bs.* ʔaŋfù(536); ZM1050

[PLB. *-ip > J. -i]

- (7) a. ji⁵⁵(「眠る」); *H.* ju³¹; *L.* i⁵⁵; *Lis.* e³¹ta⁵⁵; *Ac.* e³¹; *Lw.* jap³¹; *Las.* ju:p⁵⁵; *At.* jup⁵⁵; *C.* it⁵⁵; *WB.* ip-; *Bs.* jù(735); ZM1646
b. a⁵⁵ji⁴⁴(「影」); †*H.* a³¹ba⁵⁵; *L.* bu³⁴ʒi³³/sa⁵⁵ʒi³³; †*Lis.* e⁵⁵ur³³ŋo³¹; *Ac.* a³¹ʒit⁵⁵; †*Lw.* ʔap³¹tso³⁵; †*Las.* a⁵⁵lɔ³³; †*At.* vup²¹tso²¹; *C.* a³¹ʒut⁵⁵; *WB.* a³rip; *Bs.* —; ZM698

上の例で(2)を見ると、チノ語-i: ビルマ文語-ii の対応が見て取れる。これらはビルマ系言語で介音-jを持つものがあるが、ビルマ文語-ii および古代ビルマ語-iであることを重視し、PLB. *-iを再構する。

ビルマ文語-eiを基準に考えると、(3a~c)の例では母音の上昇(vowel raising)が生じたように見える。しかしこれらは古代ビルマ語形では-iyとなっていることに注意し、それをもとにPLB. *-iyを再構する。よってチノ語では末子音の-yが脱落した形へ音変化したとみなすことができるであろう。特に(3a, b)の例では、口語-i: リス語-iで対応していることから、チノ語とともに、口語系ではPLB形の母音と同じ種類のまま反映していったと考えられよう。

(4)もビルマ文語-weiを見るも、古代ビルマ語では-uyを持っていたと考えられるため、それを重視し、PLB. *-uyを再構する。しかし後述するように、基本的変化としてはPLB. *-uy > J. -uであると考えられるため、この問題は後に取り上げる^{注13}。

^{注13} 呉(2002)は筆者の推定する*-uyについては*-urを再構しているようだ(例, *mrur > WB. mrwe 「蛇」、WT. sbrul)。ナムイ語でbə:rであることを重視しているからなのだろうが、*-urとする積極的な証拠になるかは議論の余地がある。

(5a, b) をみると、ロロ系で-i、ビス語で-ɯ の対応をとっている。ビルマ系では対応が複雑だが、ビルマ文語の-ac > ビルマ口語-i? の変化を考慮に入れれば、主母音の変化がロロ系でも見られると言える。ただしビルマ文語-ac をそのまま再構形として用いるにはすこし問題がある。後でも述べるが、ビルマ文語の硬口蓋末子音がその当時いかなる音価を持っていたかはこれまでも議論がかなりなされておき (西 1974, Nishi 1999 など)、結論が出ていない。

ビルマ語音韻史から考察すると、ビルマ文語-ac に変化する古代ビルマ語形は主に-ac~-ec と-at があり (西 1974)、ビルマ文語はいわば-ac に合流したと見なければならぬ。(5) を見直すと、Matisoff (2003) は (5a) に対し、PLB. *ʔ-dik^L (Matisoff 2003: 346) を、(5b) に対し、PLB. *ʔ-nit (Matisoff 2003: 351) を再構している。ただし、これだけの情報では本論文において (5) に PLB. *-it を再構するには至らない。

西 (1974) は以下の対応から *-it を推定している。

[WB. -it : Akha -i? (PLw), -i (NT)]^{注14}

- (8) a. 'to close eyes' WB. hmit 'to shut (the eyes), wink the eyes'; Akha. *mya^hni^hmi^h* 'to close one's eyes' PLw
 b. 'to extinguish' ?WB. hmit 'not to appear, as color'; Akha. *mi^h-i^h* 'for a fire to go out', *la^hmi^h* 'to put out fire' PLw *mi dzà lá mí* 'to extinguish a fire' NT
 c. 'goat' WB. chit; Akha. *ci-mε^h* PLw

西 (1974) は (8) でビルマ文語-it: アカ語-i の対応から PLB. *-it を推定している。アカ語はハニ語と同じであるため、同じ対応関係をもつ (5) にも PLB. *-it を推定することができるという論理である。筆者もこれに同意したい^{注15}。

^{注14} これはビルマ文語で-it であるのに対して、Lewis (1968) のアカ語資料で-i?, 西田 (1955, 1956) のアカ語資料で-i で対応していることを示している。西 (1974) はもう一つ [WB.-it : Akha -i? (PLw), -ɯ (NT)] の対応例を用いてこの PLB. *-it 推定の問題を考えているが、本論文のこの部分には直接かかわらないので、省略する。

^{注15} (8b) に相当するチノ語は *mi⁴²*, (8c) に相当するチノ語は *tʰi⁵⁵pe⁴⁴* であるため、PLB. *-it を推定するとうまく対応しているのが見て取れる。

Matisoff (2003) はおそらくチベット文語^{注16}でそれぞれ gcig「1」、gnyis「2」^{注17}と綴る点を重視し、「1」の PLB 形に対し、韻尾-k を再構したのであろう。しかし本論文では基本的に LB 諸語内から PLB 形を再構するため、ここでは*-it としておきたい。

(6) もビルマ文語の韻母が-ac である。ロロ系-i: ビス語-ɯ だけの対応を見ると、PLB. *-it を再構したいところである。しかし、(5) と異なる点はマル系諸語 (Maruic languages)^{注18}の韻尾に-k が存在することである。主母音の対応が(5) と同じで、韻尾だけが異なることから、この PLB 形を*-ik と再構しておく。

(7a) はチノ語-i: ハニ語-ɯ: ロロ語-i: アツイ語-ɯp: ビルマ文語-ip の対応関係を持ち、PLB 形では*-ip を有すると考えられる。(7b) は(7a) のようにうまく対応していないが、チノ語-i: ビルマ文語-ip の対応関係が存在し、かつ形態的にも一致が見られるため、やはり同様の変化が起きたと見る。これらでは PLB. *-ip > J. -i の変化が起き、チノ語では末子音-p が脱落したものと考えられる。

2.1.2 チノ語 韻母-e

[PLB. *-at > J. -e]

- (9) a. se⁵⁵ (「殺す」; *H. se*³¹; *L. (南) se*⁵⁵; *Lis. se*³¹; *Ac. sat*³¹; *Lw. se*⁷⁵⁵; *Las. sa:t*⁵⁵; *At. sat*²¹; *C. sat*⁵⁵ phut⁵⁵; *WB. sat*-; *Bs. se*(706); *ZM1602*)
 b. ne⁵⁵ (「幽霊」; *H. ne*³¹ xa³¹; *L. (南) ni*²¹; †*Lis. pu*³¹ f³¹; †*Ac. ʃ*⁵⁵ p⁵⁵ zua⁵⁵; †*Lw. ø*³¹; *Las. nat*³¹; *At. nat*²¹; †*C. tam*³¹; *WB. nat*; *Bs. ʔaŋhlá*(362, soul); *ZM669*)

[PLB. *-an > J. -e]

- (10) se⁵⁵ (「撒く」; *H. se*³¹; *L. (巍) ʃ*²¹; *Lis. f*⁵⁵; *Ac. san*³¹; *Lw. səŋ*³⁵; *Las. sa:n*⁵⁵; *At. san*²¹; *C. san*³¹; †*WB. krai*-; *Bs. —*; *ZM1597*)

-e は共時的には-ε との区別が付きやすい。ただし対応する例語が少ないので、歴史的変化を考えるのは難しい面もある。

^{注16} 本論文ではワイリー (Turrel Wylie) 方式により転写する。

^{注17} 李・周 (1999) によると、「二 (= 2)」の中古漢語形は $\text{ɕi}^{\text{去}}$, 上古漢語形 $\text{*ɲei}^{\text{去}}$ である点を考慮すると、シナ = チベット語祖形として韻尾を再構することができないかもしれない。

^{注18} 通常、ロンウォー語 (マル語)・ラシ語・アツイ語などのことを言う。

(9)を見ると、チノ語-e : ハニ語-e : アツイ語-at : ビルマ文語-at の対応が一定している。よってここでは PLB. *-at を推定できるだろう。しかし、PLB. *-at > チノ語-e の例も存在し、注意を要する。このことは 2.1.3 で述べる。

(10) の例は、ビルマ文語がうまく対応していないけれども、ビルマ系諸言語 (アチャン語、ラシ語、アツイ語、チンタウ語) の韻母では -an となっているので、PLB*-an を推定する。ロンウオー語では -əŋ で対応している点も注目に値する^{注19}。

2.1.3 チノ語 韻母-e

[PLB. *-am > J. -e]

- (11) a. a³³ne⁵⁵(「臭い」; H. (墨) pi³¹ny⁵⁵; L. bo²¹ni³³; Lis. tʃhi³¹nu³³; Ac. nam⁵⁵; Lw. nẽ³¹; Las. na:m³¹; At. nam⁵¹; C. nam⁵⁵; WB. a³nam³; Bs. ʔaŋnám(512); ZM1070)
- b. pre⁴²(「飛ぶ」; H. bjo³³; L. (南) byo³³; Lis. bj³³; Ac. tʃam⁵⁵; Lw. tʃ³⁵; Las. ta:ŋ³³; At. taŋ²¹; C. tʃam⁵⁵; WB. pyam̄-; Bs. pjám(659); ZM1318)
- c. ʃe⁴²(「鉄」; H. so⁵⁵; L. ʃu³³ (du³³); †Lis. xo³³; Ac. ʃam⁵⁵; Lw. ʃẽ³¹t⁷⁵⁵; †Las. tʃ⁷³¹t⁷⁵⁵; At. ʃam⁵¹t⁷⁵⁵; C. ʃam⁵⁵; WB. saŋ; Bs. hjám(403); ZM54)
- d. tʃhe⁴⁴khw⁴⁴(「髪 of 毛」; H. tʃhe⁵⁵kh⁵⁵; L. (南) u⁵⁵tʃh³³; Lis. o⁵⁵tʃhe³³; †Ac. u³¹mui³¹; Lw. tʃhẽ³¹; Las. tʃham³³; At. u²¹tʃham⁵¹; †C. u³¹; WB. champang; Bs. támkhúŋ(89)^{注20}; ZM75)

[PLB. *-at > J. -e]

- (12) a. phe⁴⁴(「切る」; H. bje³³; †L. ze³³/tʃu³³; †Lis. tʃhu³¹; †Ac. xa³¹; †Lw. ŋẽ³⁵; †Las. tʃhi:n³³; †At. tsen²¹/jam²¹; †C. jam³¹; WB. phrat-; †Bs. hen(628); ZM1167)
- b. xe⁵⁵(「8」; H. (墨) xẽ³¹; L. (南) xe⁵⁵; Lis. hẽ³¹; Ac. ɕet⁵⁵; Lw. ʃe⁷⁵⁵; Las. ʃẽt⁵⁵; At. ʃit⁵⁵; C. ɕet⁵⁵; WB. hrac; †Bs. pèt(485); ZM804)

(11) の例からチノ語-e : アチャン語-am : チンタウ語-am : ビルマ文語-am : ビス語-am の対応が見られる。これらから PLB 形*-am を推定し、基本的な変化と

^{注19} 詳細は注 26 を参照。

^{注20} ドイ・ブイ下位方言では tsámkhúŋ である。こちらのほうが声母もよく対応している。

して PLB. *-am > J. -ε を考える。ただしチノ語-ε は様々な祖形と対応している。それについては後述する。

(12a) はビルマ文語-at を参考に、PLB. *-at を再構すべき例である。(12b) はビルマ文語が-ac であるところから、PLB でも*-ac を再構したいところだが、2.1.1 でも詳しく述べたように古代ビルマ語形を参照しなければならない。(12b) の古代ビルマ語形は yhat~het~rhac(西 1974) と綴られる。すなわち 3 種類の表記が古代ビルマ語ではなされていたわけであるが、西 (1974) に提示されている対応関係から (12b) においても PLB 形として*-at^{注21} を再構しておく。

しかし翻ってみると、*-at は 2.1.2 で見たように、チノ語では基本的に-e で対応している。大変例が乏しいため、断定はできないが、先に見た (9) の例はともに声母が歯茎音である。そしてここでの声母は両唇音あるいは軟口蓋音である。したがって声母の環境によって韻母の高低が分かれたとも考えられうる。

仮にはあるが、チノ語-e/-ε の分裂条件を以下に示す。ただ後に (31) でも見るように、歯茎音が韻母に影響を与えたと考えると、むしろ基本的変化を PLB. *-at > J. -ε と捉えたほうがよいかもしれない。よって以下のような形で定式化することになるろう。

(13) [PLB. *-at からチノ語への変化]

PLB. *-at > J. -e/ [+anterior, +coronal]__
> J. -ε/ elsewhere^{注22}

2.1.4 チノ語 韻母-ø

[PLB. *-wan > J. -ø]

- (14) a. a³³ tʰø⁵⁵ (「尖った」; H. tʰe³³; L. (巍) tʰy⁵⁵; Lis. tʰe³⁵; †Ac. liam³¹; Lw. tʃhum³¹; Las. tʃhu:n³³; At. tʃhun⁵¹; †C. lɛm³¹; WB. khywan-; Bs. —; ZM992)
- b. tsø³³ mo⁵⁵ (「鷹」; H. xa³¹ dze⁵⁵; L. tʰo⁵⁵; Lis. dze³³ thur⁵⁵; †Ac. ti³¹ mo³¹; Lw. tsum³¹; Las. tʰon³¹; At. tsun⁵¹; C. cun³¹ mo³¹; WB. cwan(鳶); Bs.

^{注21} チベット文語 bryad, 中古漢語 pæt^入, 上古漢語*pet^入(李・周 1999) も参考にすべきかもしれない。

^{注22} (12a) の通時的変化を詳細に示すと以下になるだろう。

PLB. *ʔbrat > *ʔprat > *phrat > Proto-Jino. *phje > Modern Jino. ph⁴

途中で介音-j-が脱落しているが、それは韻母が前舌母音だからである(林 2002a, b を参照)。

tsánba(49); ZM328)

[PLB. *-wam > J. -ø]

- (15) a³³ø⁵⁵(「熊」; *H.* xo³¹ɔ⁵⁵; *L.* ɣo³³; *Lis.* vɛ³¹tɿ⁵⁵; *Ac.* ɔm⁵⁵; *Lw.* vɛ̃³¹; *Las.* wɔm³¹; *At.* vam⁵¹; *C.* om⁵⁵; *WB.* wak-waŋ; *Bs.* ʔuwám(12); ZM311)

[PLB. *-wat > J. -ø]

- (16) mø⁵⁵(「空腹である、ひもじい」; *H.* mɛ³¹; *L.* mi⁵⁵; *Lis.* hẽ³¹mɯ³¹; †*Ac.* ɣut⁵⁵; *Lw.* mø^{ʔ31}; *Las.* mu:t⁵⁵; *At.* mut²¹; *C.* mut⁵⁵; *WB.* ngat-mwat-; †*Bs.* hàgbè(638); ZM1298)

[PLB. *-um > J. -ø]

- (17) sø⁵⁵(「3」; *H.* so⁵⁵; *L.* so³³; *Lis.* sq³³; *Ac.* sum³¹; *Lw.* sam³¹; *Las.* sɔm⁵⁵; *At.* sum²¹; *C.* sum³¹; *WB.* suŋ²; *Bs.* sãm(480); ZM799)

(14a, b) から見ると、チノ語-ø : ハニ語-e : ロンウオー語-um : アツイ語-un : ビルマ文語-wan の対応から、ビルマ文語を参考にして、PLB. *-wan を推定する。チノ語の韻母-e との関連から見ると、PLB. *-an > J. -e が先に起こり、PLB. *-wan > *-we > J. -ø のような変化が起こったと考えられる。すなわち、介音-w が主母音-e に円唇性を加えた と解釈できる。

(15) の例においてもチノ語の韻母-ɛ との関連から考えてみる。これも介音-w の影響で *-am に円唇性が加えられて、PLB. *-wam > *-we > J. -ø のような過程を経たものと解釈できる。しかし、それならばなぜ開口度が同じæ にならなかったかについては明確な答えがない。もしかしたら、w が絶対語頭に来たときに母音が上昇するのもかもしれない。

(16) もチノ語の韻母-ɛ との関連から考えると、これも介音-w の影響で *-at に円唇性が加えられて、PLB. *-wat > *-we > J. -ø のような過程を経たのであろう。これも開口度が上昇していることに注意しなければならない。

(17) はチノ語-ø : ハニ語-ɔ : ロロ語-ɔ : アチャン語・アツイ語・チンタウ語-um : ビルマ文語-um の対応があり、PLB. *-um を推定する。

2.1.5 チノ語 韻母-æ

- (18) lœ⁴²(「〜個」; †*H.* sɿ³¹; †*L.* ma³³; †*Lis.* mɑ³³; *Ac.* lum³¹; †*Lw.* tʃhɛ^{ʔ55}; †*Las.* tʃham⁵⁵; †*At.* tʃham²¹; *C.* lum³¹; *WB.* lum³; *Bs.* —; ZM841)

共時的にもチノ語において-æが現れる語はかなり乏しい。よってあまり明らかなことは言えない。しかし(18)からチノ語-æ : アチャン語・チンタウ語-um : ビルマ文語-um の対応が見て取れることを指摘しておく。これは(17)と重なる対応であり、これ以上のことは言えない。

2.1.6 チノ語 韻母-a

[PLB. *-ak > J. -a]

- (19) a. a³³ŋa⁵⁵(「深い」; H. nã³¹; L. (武) nã⁵⁵; Lis. nɛ⁵⁵; †Ac. lək⁵⁵; Lw. nɔ^{ʔ31}; Las. nək³¹; At. nik²¹; C. nuuk⁵⁵; WB. nak-; Bs. ʔaŋhà(545); ZM982)
- b. ja⁴²(「はずかしい」; H. sã³¹do⁵⁵; L. (武) sã⁵⁵to³³; Lis. sɔd³³to³³; Ac. ɲɔ^{ʔ31}sɔ^{ʔ55}; Lw. xo^{ʔ55}; Las. ʃɔ^{ʔ55}; At. xo^{ʔ55}; C. ɲɔ^{ʔ55}sɔ^{ʔ55}; WB. hrak-; †Bs. ʔaŋʔàj(520D); ZM1365)
- c. ŋa³³zo⁵⁵(「鳥」; †H. a⁵⁵dzi⁵⁵; L. (武) ŋa²; †Lis. nie³⁵khw³³; †Ac. ɲɔ^{ʔ55}; Lw. ɲɔ^{ʔ55}; Las. ɲɔ^{ʔ55}; At. ɲɔ^{ʔ55}; C. ɲɔ^{ʔ55}; WB. hngak; †Bs. haja(48); ZM326)
- d. ta⁴²(「登る」; H. dã³³; L. (武) dã²; Lis. dɛ³³; Ac. to^{ʔ55}; Lw. to^{ʔ31}; Las. to^{ʔ55}; At. to^{ʔ21}; C. to^{ʔ55}; WB. tak-; Bs. ta/tha(652); ZM1609)
- e. a³³pha⁵⁵(「葉」; H. a⁵⁵pã³¹; L. (武) phã⁵⁵; †Lis. sɪ³⁵ve³³; Ac. a³¹xzo^{ʔ55}; Lw. phɔ^{ʔ55}/fo^{ʔ55}; Las. a³¹fɔ^{ʔ55}; At. a²¹xa^{ʔ55}; C. a³¹xzo^{ʔ55}; WB. phak; Bs. ʔaŋphà(305); ZM376)

ビルマ文語形を参考に考えると、チノ語の-a は*-ak を主な来源と解釈することができそうだ。チノ語の-a は*-ak の末子音 k を失った結果であると考えられる。より詳細に変遷過程を述べると、PLB. *-ak > *-a^ʔ > チノ語-a を推定できよう。ロロ系諸語では末子音が脱落して、同種類の母音のまま緊喉母音になっているが、ビルマ系では母音が-o 系に変化している。緊喉母音になっていない点を除くと、チノ語がロロ系と同様の変化を経ていることが見てとれる。

2.1.7 チノ語 韻母-ə

[PLB. *-aŋ > J. -ə]

- (20) a. ɕo³³kjə⁵⁵(「蚊」; H. ja⁵⁵go³¹; †L. bu³³zur³³; †Lis. ɲɛ⁵⁵mã³³; †Ac. phɔp⁵⁵; Lw. kjɔ³¹; Las. kjaŋ³³; At. kjaŋ⁵¹; C. caŋ³¹khzãŋ⁵⁵; WB. khrang; †Bs. ʔətòn(72); ZM360)

- b. mjə⁴²(「見える」; *H. mo*⁵⁵; *L. yur*²¹*mo*³³; *Lis. lo*⁵⁵*mo*³³; *Ac. en*³¹*mzəŋ*⁵⁵; *Lw. mjɔ̃*³¹; *Las. mja:ŋ*³¹; *At. mjaŋ*⁵¹; *C. mzəŋ*⁵⁵; *WB. mrang-*; *Bs. hmjáj*(596); ZM1471)
- c. nə⁴²(「君、あなた(主格)」; *H. no*⁵⁵; *L. nur*³³; *Lis. nu*³³; *Ac. nuəŋ*⁵⁵; *Lw. nɔ̃*³¹; *Las. nəŋ*³¹; *At. nəŋ*⁵¹; *C. nɔŋ*⁵⁵; *WB. nang*; *Bs. nəŋ*(439); ZM931)
- d. pə³³*thu*⁵⁵(「兎」; †*H. tho*³¹*la*³³; †*L. (巍) tho*³³*lo*³³; †*Lis. a*⁵⁵*ya*⁵⁵; *Ac. pzaŋ*⁵⁵*tai*⁵⁵; *Lw. paŋ*³⁵*tai*⁵⁵; *Las. paŋ*⁵⁵*tei*⁵⁵; *At. paŋ*⁵⁵*tai*⁵¹; *C. pzaŋ*³¹*tai*⁵⁵; †*WB. jun*; †*Bs. katáj*(46); ZM292)

(20a~c) を見てみよう。チノ語-ə (: アチャン語-əŋ/-uaŋ) : ロンウオー語-ɔ̃ : アツイ語-əŋ : ビルマ文語-ang を読みとることができる^{注23}。(20d) はビルマ文語形が同源とは考えられない。しかしこの例でもチノ語-ə : アチャン語-əŋ : アツイ語-əŋ の対応を重視し、(20a~c) と同様の変化が起こったと見る。よって以上の例から PLB. *-əŋ > J. -ə の変化が起こったとする。

2.1.8 チノ語 韻母-ɔ̃

[PLB. *-a > J. -ɔ̃]

- (21) a. nɔ̃⁴²(「病」; *H. na*⁵⁵; *L. na*³³; *Lis. na*³³; *Ac. nɔ̃*⁵⁵; *Lw. nɔ̃*³¹; *Las. nɔ̃*³¹; *At. no*⁵¹; *C. nɔ̃*⁵⁵; *WB. a³naa*; *Bs. [?]əndá*(763A); ZM1160)
- b. ŋɔ̃⁴²(「私」; *H. ŋa*⁵⁵; *L. ŋa*³³; *Lis. ŋua*³³; *Ac. ŋɔ̃*⁵⁵; *Lw. ŋɔ̃*³¹; *Las. ŋɔ̃*³¹; *At. ŋɔ̃*⁵¹; *C. ŋɔ̃*⁵⁵; *WB. ngaa*; *Bs. ga*(438); ZM928)
- c. lõ⁴²(「来る」; *H. la*⁵⁵; *L. la*³³; *Lis. la*³³; †*Ac. zə*³⁵; *Lw. li*⁵⁵/*lõ*³¹; *Las. le*⁵⁵; *At. le*⁵⁵; *C. lõ*⁵⁵; *WB. laa-*; *Bs. lá*(649B); ZM1491)
- d. tsõ⁵⁵(「食べる」; *H. dza*³¹; *L. (巍) dza*²¹; *Lis. dza*³¹; *Ac. tɕ*³¹; *Lw. tsõ*³⁵; *Las. tsõ*³³; *At. tso*²¹; *C. cɔ̃*³¹; *WB. caa*²⁻; *Bs. tsà*(631); ZM1198)
- e. ŋɔ̃⁴²(「聞く、尋ねる」; *H. na*⁵⁵*xa*³¹; *L. ŋa*³³; *Lis. nɔ̃*³³*nɔ̃*³³; *Ac. ŋi*³¹; †*Lw. mjik*⁵⁵; †*Las. mje*³³; †*At. mji*²¹; *C. ni*³¹; *WB. naa-thong-*; *Bs. hná*(667); ZM1708)

^{注23} (20a) のマル系諸語の例では主母音が緊喉母音となっているが、本論文ではその理由を問わない。

[PLB. *-waŋ > J. -o]

- (22) pho⁵⁵(「開く」; H. pho³³; L. pho²¹; Lis. phy³³; Ac. phoŋ³⁵; Lw. phuŋ⁵⁵; Las. pha:ŋ⁵³; At. phoŋ⁵⁵; C. phoŋ³⁵; WB. phwang³-; Bs. phoŋ(714); ZM1461)

ここでは母音の上昇を見ることができる。チノ語-o : ハニ語-a : ロロ語-a : アチャン語-o : ロンウオー語-o : アツイ語-o : ビルマ文語-aa の対応が見て取れる^{注24}。(21e)ではビルマ系とロロ系とで異なった語形が現れているが、チノ語はロロ系と一貫して対応している。これらから PLB. *-a > チノ語-o の変化が考えられよう。とくにチノ語がアチャン語やロンウオー語などのビルマ系言語と同じ-o系の母音へ変化していったことも注目に値する。

また(22)ではチノ語-o : ビルマ文語-wang の対応が見て取れる。ここで PLB. *-waŋ を立てるとすると、チノ語への変化として *-waŋ > *-wə > -o を考えることができる。つまり、(20)で見たように、一旦 *-aŋ > *-ə の変化が起こってから、-w-の影響で円唇化が起こったと考える^{注25}。

^{注24} 西田(2000: 292)ではアチャン語隴川方言の音変化で、ビルマ文語-aに対応するセットとして、-uaを挙げ、「隴川方言では、a母音自体はoに変化したのが部分的に新しい合口韻uaを発生させた。しかしその発生の条件は明らかにできない」と述べている。PLB. *-waに対して、アチャン語では-oで対応していることから、祖形の合口韻は融合したが、一方で単母音である*-aに関しては一旦-oになったものの、*-aの一部が分裂し-uaとなったと考えられる。西田(2000)の提示する内容をまとめ、図式化すると以下になる。

PLB.	Ac.
*-wa	-o
*-a	-ua

^{注25} PLB. *-waŋ > J. -oとなる例も見受けられる。

o⁴²(「入る」; H.(墨) u⁵⁵; L. vu³³; †Lis. du³¹; Ac. oŋ⁵⁵; Lw. vɔ³¹; Las. va:ŋ³¹; At. vaŋ⁵¹; C. oŋ⁵⁵;
WB. wang-; Bs. ʔəŋ ʔé/le(655); ZM1447)

この例もビス語-oŋ : ビルマ文語-wang の対応関係が見られることから、PLB. *-aŋと再構するが、チノ語ではより狭い母音に反映している。wが絶対語頭にあることがその理由の一つになるかもしれない。今後の課題としたい。

2.1.9 チノ語 韻母-ɣ

[PLB. *-jan > J. -ɣ]

- (23) a. m̄jɣ⁵⁵(「熟している」; *H. mjɔ*³³; *L. m̄i*²¹; *Lis. m̄i*³³; †*Ac. ŋeŋ*³⁵; *Lw. maŋ*⁵⁵; *Las. mjə:ŋ*⁵³; *At. mjij*⁵⁵; †*C. t̄ɕwŋ*³⁵; *WB. hmañ*³⁻; *Bs. ʔaŋhmiŋ*(764B); ZM1637, 1638)
- b. a³³t̄fhy⁵⁵(「酸っぱい」; *H. t̄he*⁵⁵; *L. t̄i*³³; *Lis. t̄w*³³; †*Ac. m̄zək*⁵⁵; *Lw. t̄ij*³¹; *Las. t̄j̄:n*³³; *At. t̄j̄n*⁵¹; *C. t̄ɕen*⁵⁵; *WB. khjañ*-; *Bs. ʔaŋchén*(549); ZM1072)

[PLB. *-ay > J. -ɣ]

- (24) tshɣ⁴²(「10」; *H. t̄she*⁵⁵; *L. t̄shi*³³; *Lis. t̄sh̄*³³; *Ac. t̄he*⁵⁵; *Lw. t̄shɛ*³¹; *Las. t̄ä*³¹t̄she³³; *At. t̄she*⁵¹; *C. ta*³¹t̄shi⁵⁵; *WB. chay*-; *Bs. t̄shè*/† *s̄ip*(487); ZM806)

[PLB. *-im > J. -ɣ]

- (25) lɣ⁴⁴(「転がる」; *H. lur*³¹; *L. (南) lur*³³; *Lis. le*⁵⁵; *Ac. liŋ*³⁵; *Lw. laŋ*⁵⁵kum³¹; *Las. læ:ŋ*³¹; *At. leŋ*²¹; *C. liŋ*³¹; *WB. lim*³⁻; *Bs. làn*(730); ZM1361)

-ɣは後に述べる-wuとも区別の付きにくい難解な音である。例からもわかるように(28)にも見られるビルマ文語-añの対応が存在する。よって-ɣは複雑な対応をなすことから、多源的であると推測できる。より具体的にみると、(23a)から、チノ語-ɣ : ロロ語-i : ロンウオー語-aŋ : アツイ語-iŋ : ビルマ文語-añの対応を取り出せる。ビルマ文語をもとに考察すると、PLB. *-añを推定することになるが、PLB形の段階でñが韻尾として考えられるかは疑わしい。

そこでロンウオー語の韻尾に注目したい。ロンウオー語の韻尾が-ŋとなっている例は(10)でも見たが、PLB形韻尾*-nを考察できる。ここでもそれを重視し、韻尾に*-nを推定し、主母音の前に-jが存在したとする。その-jの影響で韻尾の-nがビルマ文語では口蓋化したと考える。よってPLB. *-jan > チノ語-ɣを考察する^{注26}。

一方ここで重要なのは、(23b)と(24)において、チノ語-ɣ : ハニ語-e : ロロ語-iが対応していることである。(24)のビルマ文語は-ajをもっている。それを

^{注26} 西田(2000: 281)はビルマ系祖語(PB.)とビルマ系諸語との対応表を以下のように挙げている(a, bなどの番号は筆者が付けたもの)。

もとに PLB. *-ay を再構したいが、この*-ay は様々な対応例^{注27}があり、一概には言えない。

また (25) の例からチノ語-ɣ : ハニ語-w : アチャン語-ig : ロンウオー語-aŋ : ラシ語-ə:ŋ : ビルマ文語-im が対応しているのがわかる。例が少ないので難しいが、ここではビルマ文語に従い、PLB. *-im > J. -ɣを変化の一つに数えておく。

2.1.10 チノ語 韻母-o

[PLB. *-ok > J. -o]

- (26) a. khjo⁵⁵(「6」; *H.* ku³¹; *L.* (巍) k^ho²¹; *Lis.* t^ho³¹; *Ac.* xzo⁷⁵⁵; *Lw.* khjauk⁵⁵; *Las.* khjuk⁵⁵; *At.* khju⁷⁵⁵; *C.* chu⁷⁵⁵; *WB.* khrok; †*Bs.* hók(483); ZM802)

	PB.	Lw.	Pl.	Las.	At.	SB.
a.	*-ak	-ɔʔ	-aʔ	-ɔʔ	-oʔ	-eʔ
b.	*-ang	-õ	-õ	-aŋ	-aŋ	-in
c.	*-ap, *-at	-ɛʔ	-ɛʔ	-ap, -at	-ap, -at	-aʔ
d.	*-am, *-an	-ê	-ê	-am, -an	-am, -an	-an

まず、断っておかねばならないのは PB. と PLB. の韻母の祖形は基本的に同じであることである。

このなかでここで関係するのは b と d である。b に関しては、本論文でも (20a~c) で見た対応とほぼ変わらない。しかし d は問題がある。PLB. *-an の対応は、ロンウオー語では基本的に -aŋ であることをすでに (10) で見た。西田 (2000: 281) もその例を掲げている。

	PB.	Lw.	Pl.	Las.	At.
e.	*pan 「花」	pəŋ ³⁵	pɛ̃ ³¹	pan ³³	pan ²¹

この例からもわかるように、PB.=PLB. *-n : Lw. -ŋ である。よって、上の表の対応は完全に正確であるとは言えない。

チノ語では「花」を a⁵⁵po⁴⁴ という。よって PLB. *-an > J. -o という特殊変化を設定しなければならない。

^{注27} 例えば以下のような対応がある。

(i) a⁵⁵krə⁵⁵(「広い」; †*H.* je⁵⁵; *L.* a³³dʒɿ³³; †*Lis.* ɛɛ³³; †*Ac.* kaŋ³¹; *Lw.* lɛ̃³¹; *Las.* la:m³¹; *At.* lam⁵¹; *C.* kaŋ³¹; *WB.* kyay-; *Bs.* ʔaŋklú(527); ZM976)

(ii) pu³³ki⁵⁵(「星」; *H.* a³¹gu⁵⁵; *L.* mu³³ɰ³³; *Lis.* ku³³zə³¹/kə³³ma³³ze³³; *Ac.* khzə⁵⁵; *Lw.* kji³¹; *Las.* kji³³; *At.* kji⁵¹; *C.* tshi⁵⁵zum³¹; *WB.* kray; *Bs.* ʔùkù(319); ZM5)

- b. a⁵⁵no⁴²(「後ろ」; *H. no⁵⁵xo³³*; *L. (サニ) no⁴⁴qo⁴⁴*; *Lis. ka⁵⁵ne⁵⁵si³³*; *Ac. noŋ⁵⁵pa³¹*; †*Lw. tho³¹*; †*Las. thaŋ³³*; †*At. thaŋ⁵¹*; *C. chi³¹noŋ⁵⁵*; *WB. no:k*; *Bs. noŋnoŋ/noŋnoŋ(448)*; *ZM713*)
- c. lo³³(「ウジ虫」; *H. lu³³tho³¹*; *L. bu³³tu³³zu³³*; †*Lis. hē³¹tho³⁵*; †*Ac. nu⁷⁵⁵*; *Lw. lauk³¹*; *Las. luk³¹*; *At. lu⁷²¹*; †*C. pau³¹*; *WB. lo:k-koŋ*; *Bs. —*; *ZM359*)

[PLB. *-wa > J. -o]

- (27) zo⁵⁵(「歩く」; *H. zu³¹*; *L. (南) so²¹*; †*Lis. gi³³*; *Ac. so³¹*; *Lw. su³⁵*; *Las. so⁵⁵*; *At. so²¹*; *C. so³¹*; *WB. swaa²*-(行く); †*Bs. jò(648)*; *ZM1815*)

(26) に見るように、チノ語-oの基本的対応としては、チノ語-o: ロンウオー語-auk: アツイ語-u²: ビルマ文語-okが取り出せる。ビルマ文語を基準にして、上の対応より PLB. *-okを再構する。チノ語の-oも-a同様、末子音の-kを摩滅させる結果となっていることは興味深い。ただし母音が若干上昇していることも注意すべきである。

一方で例は乏しいが、チノ語-o: ハニ語-u: アチャン語-o: ロンウオー語-u: アツイ語-o: ビルマ文語-waの対応関係から、ビルマ文語を基準として、PLB. *-waを再構する^{注28}。PLB. *-aの場合と異なり、母音が狭く反映している。

2.1.11 チノ語 韻母-w

[PLB. *-jan > J. -w]

- (28) a. a⁵⁵pru⁴⁴(「一杯の、満ちた」; *H. bjo³³*; *L. (南) bi³³*; *Lis. bi³³*; *Ac. pzəŋ³⁵*; *Lw. pjaŋ⁵⁵*; *Las. pjə:ŋ⁵⁵*; *At. pjij⁵⁵*; *C. puŋ³⁵*; *WB. prañ³⁻*; *Bs. ʔaŋpluŋ(547)*; *ZM984*)
- b. mu⁴²(「響く」; †*H. gø³¹*; *L. (巍) mu⁵⁵*; *Lis. mu³³*;

^{注28} (27) では声母において、チノ語 z-: ハニ語 z-: ビルマ文語 s-となっており、通常のチノ語 s-: ビルマ文語 s-の対応関係からずれているようにも見える。しかし他にも以下の例がある。

(i) zo⁵⁵ku⁵⁵(「子供」; *H. za³¹gu³¹*; *L. a³⁴zi³³*; *Lis. zā³¹ne³³zā³¹*; *Ac. tsā³¹oi³¹*; *Lw. tsō³⁵ʃō³¹*; *Las. —*; *At. tsō²¹ʃaŋ⁵¹*; *C. tso³¹ui³¹*; *WB. saa²*-(「息子」); †*Bs. jàke(159)*; *ZM169*)

この(i)の例では、チノ語-o: ハニ語-a: ビルマ文語-aaの対応が取り出せ、(21)の対応関係とも合致する。よってチノ語 z-: ビルマ文語 s-の対応規則も立てておく。この点については西田(1964)と同じ意見である。

Ac. mʒəŋ⁵⁵; Lw. mjaŋ³¹; Las. mjə:ŋ³¹; At. mjij⁵¹; C. mɤŋ³¹; WB. mrañ-; Bs. —; ZM1094)

c. jo⁵⁵fɯ⁴²(「長い」; †H. mo⁵⁵; L. a³³ʂo³³; Lis. fɿ³³; Ac. səŋ⁵⁵; Lw. xaŋ³¹; Las. fə:ŋ³³; At. xiŋ⁵¹; C. sɤŋ⁵⁵; WB. hrañ-; †Bs. ʔaŋhmoŋ(758); ZM972)

[PLB. *-uy > J. -u]

(29) a. khw⁵⁵ŋi⁵⁵(「犬」; H. a³¹khur³¹; L. khur³³; Lis. khur³¹gə³¹; Ac. xui³¹; Lw. lə³¹kha³⁵; Las. khui⁵⁵; At. khui²¹; C. fui³¹; WB. khwei²; Bs. khù(18); ZM289)

b. a⁵⁵m̄u⁵⁵(「毛」; †H. xo³³; L. (武) mɸ¹¹; Lis. e⁵⁵mur⁵⁵; Ac. a³¹mui³¹; Lw. fɔ³⁵muk⁵⁵; Las. fɔ⁵⁵mou⁵⁵; At. fɔ²¹mau⁵⁵; C. mui³¹; WB. a³mwei²; Bs. ʔaŋhm̄u(90); ZM266)

c. u³³(「蛇」; H. (墨) u⁵⁵lu⁵⁵; †L. ʂɿ³³; Lis. le³⁵mur³¹ch̄u³³; Ac. mzui⁵⁵; Lw. lɔ³¹mɔi³¹; Las. laŋ³³mju³¹; At. laŋ⁵¹mui⁵¹; C. mzui⁵¹; WB. mrwei; Bs. ʔúláŋ(60); ZM347)

[PLB. *-i > J. -u]

(30) a. a³³sur⁵⁵(「果実」; H. a⁵⁵sɿ³¹; L. sɿ³³dza³³lu³³ma³³; †Lis. e⁵⁵ni³⁵ma³³; Ac. ʂə³¹; Lw. fɿ³⁵;

Las. fɿ⁵⁵; At. fɿ²¹; C. ʂɿ³¹; WB. a³sii²; Bs. ʔaŋsù(278); ZM378)

b. su⁵⁵jo⁴⁴(「知る」; †H. xy³³; L. (武) sɿ⁵⁵; Lis. sur⁵⁵; Ac. sa³⁵; Lw. se⁵⁵; Las. sɛ:⁵³; At. se⁵⁵; C. sa³⁵; WB. si³-; †Bs. bè(590); ZM1798)

-ɤの対応が複雑で、多源的であるという推測を立てる一方で、-u は比較的安定した対応が見られる。まず-xにもあったチノ語-u : ハニ語-ɔ : アチャン語-əŋ : ロンウオー語-aŋ : アツイ語-iŋ : ビルマ文語-añ の対応があることから、2.1.9 同様、PLB. *-jan > チノ語-u を変化の一つとしてみたい。

次に(29)を見ると、ビルマ文語では-wei となっている。しかしビルマ語音韻史では古代ビルマ語-uy > ビルマ文語-wei の変化があったとされるのを重視し、PLB. *-uy を再構する。ロロ系では対応が一定しているとまでいえないが、後舌非円唇母音で対応していることは共通している。ビルマ系との関連で見ると、チノ語-u : アチャン語-ui : ビルマ文語-wei の対応が一定している。

さらに問題があるのは(30)の例である。(30a)ですこし異なる対応をしているが、(30b)においてはチノ語-u : アチャン語-a : ロンウオー語-e : ラシ語-e : ア

ツイ語-e: ビルマ文語-i が対応している^{注29}。ここから PLB. *-i を再構したい。しかし、すでに 2.1.1 で見たように、PLB. *-i に対応するチノ語の韻母は-i であった。チノ語-u になっている (30) を見ると、声母が歯茎音の s-であるため、PLB.*-i の変化は以下のように条件付けられるであろう^{注30}。

(31) [PLB. *-i からチノ語への変化]

PLB. *-i > J. -u or -ʌ/ [+anterior, +coronal]__
>J. -i/ elsewhere

2.1.12 チノ語 韻母-u

[PLB. *-u > J. -u]

- (32) a. a³³thu⁵⁵(「厚い」; H. *thu*⁵⁵; L. (巍) *thu*⁵⁵; Lis. *thu*³³; †Ac. *kan*³¹; Lw. *thau*³¹; Las. *thu*³³; At. *thu*⁵¹; †C. *kan*³⁵; WB. *thuu*-; Bs. [?]*aŋhú*(531); ZM980)
- b. a⁵⁵nu⁵⁵(「たおやかな」; H. (墨) *nu*³¹; L. *i*³⁴*nu*³³; †Lis. *le*⁵⁵; Ac. *ɲuat*⁵⁵; Lw. *nau*⁵⁵; Las. *nu*⁵⁵; At. *nu*⁵⁵; C. *ɲɔt*⁵⁵; WB. *nu*³⁻; Bs. [?]*aŋnùm*(534); ZM1057)
- c. a³³vu⁵⁵(「腸」; H. *u*⁵⁵; L. *vu*³³; Lis. *vu*³³; Ac. *a*³¹*u*⁵⁵; Lw. *au*³¹; Las. *u*³³; At. *u*⁵¹; C. *a*³¹*u*⁵⁵; WB. *uu*; Bs. [?]*aŋ*[?]*ú*(146); ZM149)

^{注29} (30b) を見ると、ロロ語-ɲ: ラシ語-ɛ: となっている。これらはビルマ文語が第3声調(緊喉調)であることから、祖形においては*ʔ-が声母に存在したと考えたい(詳細は林 2002c を参照)。チノ語では PLB. *ʔ-が高声調に反映している。一方 (30a) ではロロ語-ɲ: ラシ語-ɲとなっている。全体を通してみるとロロ語のみが緊喉母音となっている。なぜロロ語のみ緊喉母音であるかは問題であるが、今後の課題としたい。

^{注30} 他にも以下のような例があるため、上記 (31) のような条件付けを行った。

a³³ɲɤ⁵⁵(「赤い」; H. *ɲi*⁵⁵; L. *a*³³*ɲi*³³; †Lis. *sɪ*³¹; Ac. *na*⁵⁵; Lw. *nɛ*³¹; Las. *nɛ*³¹; At. *ne*⁵¹; C. *na*⁵⁵; WB. *nii*-/a-*nii*; Bs. [?]*aŋhné*(502); ZM1007)

この例は場合によっては a³³ɲu⁵⁵ と発音されることもあり、注意すべきである。しかし、調査では a³³ɲɤ⁵⁵ と聞こえる場合が多いため、ここでは上のように表記した。

[PLB. *-o > J. -u]

- (33) a. kju⁵⁵(「9」; *H.* (墨) yu³¹; *L.* gu³³; *Lis.* ku³³; *Ac.* kau³¹; *Lw.* kuk³¹; *Las.* kou³³; *At.* kau²¹; *C.* kau³¹; *WB.* ko²; †*Bs.* kâw(486); ZM805)
b. pu⁵⁵tfu⁵⁵(「虫」; *H.* (墨) pi³¹tfy³¹; *L.* bu³³; †*Lis.* ma³³xu³³; *Ac.* pau³¹; *Lw.* puk⁵⁵; *Las.* pou³³; *At.* pau²¹; *C.* pau³¹; *WB.* po²kong; *Bs.* ?aŋbà(71); ZM353)
c. a³³ŋu⁵⁵(「緑」; *H.* nu⁵⁵; *L.* (巍) ?n⁵⁵tʂ³³; *Lis.* ni³⁵tʂi³¹; *Ac.* ŋau⁵⁵; *Lw.* ŋjuk³¹; *Las.* ŋja:u³¹; *At.* ŋjui⁵¹; *C.* ŋau⁵⁵; *WB.* a³ŋo-rɔŋg(茶色); †*Bs.* ?aŋkhjaw(508); ZM1009)

[PLB. *-up > J. -u]

- (34) a. kju⁵⁵(「縫う」; *H.* gu³注31; *L.* gu⁵⁵; *Lis.* dz³¹; *Ac.* xzop⁵⁵; *Lw.* khjap⁵⁵; *Las.* khju:p⁵⁵; *At.* khjup⁵⁵; *C.* chup⁵⁵; *WB.* (ap) khyup-; *Bs.* ku(680); ZM1324)
b. ju³³(「揺れる」; †*H.* dz³¹by⁵⁵; *L.* hi³³; †*Lis.* u³⁵; †*Ac.* ŋon³⁵; †*Lw.* fak⁵⁵; †*Las.* fɛ:⁵⁵; *At.* xe⁵¹; *C.* ɛ³⁵; *WB.* hlup-; *Bs.* li/†pɣk/†juúkhasankà(736); ZM1752)

まず(32)を見ると、チノ語-u: ハニ語-u: ロロ語-u: ロンウオー語-au: アツィ語-u: ビルマ文語-u の対応は一定しているように見える。これらから、ビルマ文語を主軸に考え、PLB. *-u を再構し、PLB. *-u > J. -u であると見なす。一方で(33)を見ると、チノ語-u: ハニ語-u: ロロ語-u: ロンウオー語-uk: アツィ語-au: ビルマ文語-o の対応が存在する。ここでもビルマ文語を基準に考えると、PLB. *-o注32を再構することとなる。

すなわち、この2つの基本的変化をあわせてみると、PLB. *-u, *-o > J. -u の合流があったと考えられる。(33c) はアツィ語ですこし異なっているが、(33a, b)

注31 黄(1992)の資料のまま掲載する。

注32 本論文であげたビルマ文語-o はビルマ語学の伝統に即すと -ui と転写されることが多いため、PLB. *-o は容易に異論を唱えられるだろう。しかしビルマ文語-ui がそのままその当時から発音されていたかどうかはかなり疑わしいこともまた重要である。先行研究ではこの音が中舌母音を表していたと考えるものが多い。Matisoff(1972) は*-ö, Bradley(1979) は*-o, 西田(2000) は*-u と再構している。本論文では、これがチベット文語でも-o で対応している事実を重視し、*-o で再構する。

の変化に準ずるものとする^{注33}。

また (34a) の例は、チノ語-u に対して、ハニ語-u : ロロ語-u : アチャン語-op : ラシ語-u:p : アツイ語-up : ビルマ文語-up が対応している。これらから例は少ないが、PLB. *-up を再構し、PLB. *-up > J. -u の変化を考えたい。(34b) の例は対応している言語が少ないが、同様の変化が起きたと見なしておきたい。立ち戻ってみると、すでに (7) のところで見たとように、チノ語では PLB の母音と同じく、末子音-p が脱落していると見ることができる。

2.2 特殊例

ここでは基本的な対応で扱えない特殊な例を取り上げる。

[PLB. *-ak > J. -e]

- (35) me³⁵(「夢」); H. ju³¹ma³³; L. e³³mo²¹; Lis. e³¹me³³; Ac. it⁵⁵mo⁷⁵⁵; Lw. ja³¹mo⁷³¹; Las. jə⁵⁵mo⁷³¹; At. ju⁵⁵mo⁷²¹; C. in³¹mo⁷⁵⁵; WB. ip-mak; Bs. mɛbún búm(586); ZM699)

2.1.6 の (19) で見たように、PLB. *-ak は基本的にチノ語では -a で対応する。しかし (35) では -e で対応している。この条件付けは現在のところかなり難しい。ただ、これはビルマ文語からビルマ口語への変化で、WB. -ak > SB. -e⁷ が存在することを考慮すると、主母音の変化がビルマ語に近い形で起こり、末子音が脱落したと考察することができる^{注34}。

[PLB. *-a > J. -ə]

- (36) a. pja⁵⁵ja⁵⁵(「蜂」); H. bja³¹si⁵⁵; L.(南) bio²¹; †Lis. tɕu³³pu³³; Ac. tɕua³¹ɕaŋ³¹; Lw. pjə³⁵jə³¹; Las. pji³³jaŋ³³; At. pjə²¹jaŋ²¹; C. tɕə³¹jaŋ³¹; WB. pjaa²; Bs. pjà(77); ZM367)
- b. tshə⁵⁵khə⁴²(「塩」); H. tsha³¹dɿ³¹; L. tshur³³; Lis. tsha³¹bə³³; Ac. tɕhə³¹;

^{注33} 李 (2000) は (33c) の例語を *-au という二重母音を持った祖形のもとで扱っている。筆者はこの考えを採らない。またビルマ文語で ño¹ となっているが、通常これに相当する日本語訳は「茶色」である。ただしロロ=ビルマ系の比較の際、ビルマ文語を用いるときはこの語を使う方がよいようだ(藪直談)。

^{注34} 他にも PLB. *-ak > J. -o となる例も存在する。

mjo⁵⁵(「草」); †H. dza³³ya³¹; †L. zɿ³³; Lis. mu³³tʃhi³¹; †Ac. sa⁵⁵; Lw. maŋ³⁵; Las. maŋ⁵⁵; †At. nam²¹; †C. sa⁵⁵; WB. mrak-pang; †Bs. bòkà(302); ZM436)

チノ語-o に対し、ロンウオー語-aŋ: ラシ語-an: ビルマ文語-ak が対応しており、他の対応関係とかなり異なるため、特殊なものとして位置づけたい。

Lw. tsho³⁵; Las. tsho⁵⁵; At. i⁵⁵tʃum²¹/tsho⁵⁵; C. cho³¹; WB. chaa²;
Bs. tshòmè(408); ZM61)

2.1.8 の(21) で見たように、PLB. *-a は基本的にチノ語-ə に反映している。しかし(36) に見るように、チノ語-ə に反映している例も散見される。チノ語-ə : ハニ語-a : ロンウオー語-ɔ : アツイ語-o : ビルマ文語-aa など 2.1.8 で見た対応関係と共通しているところもある。ただし条件付けは難しい。PLB. *-a > J. -ɔ と同じ程度母音上昇していることは言えるようである。

[PLB. *-ok > J. -ø]

(37) khø⁴⁴(「怖がる」); H. gu³³; L. (巍) go³³; Lis. dzo³³; Ac. zo⁷⁵⁵; Lw. kjauk³¹;
Las. kju:k³¹; At. kju²¹; C. ju⁵⁵; WB. krøk-; Bs. khɛ(689); ZM1366)

(37) はビルマ文語の-ok を参考に、PLB として*-ok を再構する例である。しかしこの例を見る限り、チノ語では通常反映である-o ではなく、-ø で対応している。音節全体としては PLB. *grok を再構することになるが、その変化は

PLB. *grok > *krøk > Proto-Jino. *^ʔkjo^ʔ > *khjo > Modern Jino. khø

のようになる。ここで通常は*khjo の段階からは何も変化せず khjo のまま現代チノ語でも安定すると理論上予測されるのだが、現実には-j が主母音-o と融合して-ø となったのである。ただしその理由はいまだ判然としない。

[PLB. *-um > J. -ə]

(38) a⁵⁵lə⁴⁴(「丸い」); †H. ɣɔ³³; †L. ma³³li³⁴pu³³; Lis. lu³³; Ac. lum³¹; Lw. lan⁵⁵;
Las. læ:ŋ⁵⁵; At. liŋ⁵⁵; C. lum³¹; WB. lum²-; Bs. —; ZM990)

(38) も通常対応と異なっている。ここではチノ語-ə : ロンウオー語-aŋ : ラシ語-ə:ŋ : アツイ語-iŋ が対応している。西田(2000: 281) はロンウオー語-aŋ : ラシ語-ə:ŋ : アツイ語-iŋ が対応している場合、ビルマ祖語では*-aŋ を立てている。上でも述べたように(2.1.9 参照)、西田(2000) の再構形が*-aŋ のとき、筆者は*-jan を再構する。ここでも変化の一つとして PLB. *-jan > J. -ə を考察しておくべきであろう。

[PLB. *-ɔ > J. -a]

(39) pja⁴²(「話す」); †H. e⁵⁵; L. (巍) bɿ³³; †Lis. the³³; Ac. kzai⁵⁵; †Lw. ta⁵⁵/tʃau³¹;
†Las. tə:⁵³; †At. tai²¹; C. kzai⁵⁵; WB. prɔ²-; †Bs. ci(663); ZM1649)

(39) の例ではチノ語-a : アチャン語・チンタウ語-ai : ビルマ文語-ɔ の対応する

例で、PLB. *-ɔ を再構することとなろう。しかし、チノ語-a は PLB. *-ak の反映であるのが基本であり、この対応は例外的であると見るべきであろう。

2.3 韻母の対応—まとめ—

ここで韻母の基本的な対応をまとめてみよう。基本的にこの節で述べてきたチノ語の韻母の順番に並べている。ただし、未だ確定的でないチノ語の-æの対応は省略している。なお、韻母全ての対応表ではないので、その点に関しては今後整理を進めていきたい。

(40) [韻母の対応のまとめ]

PLB.	チノ語	ハニ語	ロロ語	アチャン語	ビルマ文語
*-i/elsewhere	-i	-i	-u/-E	-i	-i
*-i/[歯茎音]__	-u/-ɣ		-ɿ	-ə/-a	
*-it	-i		-i	-a	-ac
*-ik		-ɿ		-ək	
*-iy		-i	-i	-i	-ei
*-ip		-u	-i	-e	-ip
*-an	-e	-e	-ɿ	-an	—
*-at/[歯茎音]__		-e	-e	-at	-at
*-at/elsewhere	-e			-et	
*-am		-ɿ	-i	-am	-aŋ
*-wan	-∅	-e		—	-wan
*-wam		-ɔ	-ɔm	-waŋ	
*-um			-ɔ	-um	-uŋ
*-wat		-e	-i	—	-wat
*-ak	-a	-a	-a	-ɔ [?]	-ak
*-aŋ	-ə	-o	-o/-u	-aŋ	-ang
*-a		-a		-ɔ/-ua	-a
	-ɔ		-a		
*-waŋ		-ɔ	-o	-ɔŋ	-wang
*-ɔk	-o	-u	-o/-u	-ɔ [?]	-ɔk
*-im	-ɣ	-u	-u	-iŋ	-im
*-jan		-ɔ/-e	-i/-u	—	-aŋ

	-w	-o		-əŋ	
*-uy		-w	-y/w	-ui	-wei
*-o	-u	-u	-u	-au	-o
*-u				-u	-u
*-up				-u	-op

ここでもう一度 (40) の表を見ながら、PLB からの各言語の対応関係を整理してみよう。

まず*-i, *-a, *-u の基本 3 母音の反映についてみると、*-a を除いて、チノ語は基本的に他の言語と同じように、祖語の母音と同種である。ただし、*-i に関しては歯茎音声母によって韻母が変化する場合もある。また*-a に関しては、ハニ語・ロロ語が他の 2 母音とともに祖語の母音を保持しているのに対し、チノ語はアチャン語と同じく-o に変化していったことが特徴的である^{注35}。*-o もチノ語では-u になっていることから、*-a, *-o に関しては母音の上昇がチノ語において起こったと見ることもできる。つまり、*-i, *-u といった高母音はチノ語において同種であり、*-a, *-o の非高母音は上昇していったと見ることもできる。

また*-ip, *-up の*-p 韻尾をもつ形式の反映についてみると、チノ語はロロ語と同じく、同種の母音のまま*-p 韻尾の脱落が起きたと考えられる。*-up に関してはハニ語もこのように考えてよいだろう。しかし、アチャン語ではいずれも異なる方向へ変化している。このことは*-ak, *-ok といった*-k 韻尾をもつ形式の変化にも当てはまる。*-t 韻尾をもつものは、*-at はロロ系において母音が類似しているものの、祖形の母音の種類を変えている。一方、*-it は祖形の主母音の種類を変えていない。

*-at の場合と同じく、PLB において鼻音韻尾がある場合も現代のチノ語ではかなり異なる母音に反映している。鼻音韻尾の場合、ロロ系は各言語でかなり違った母音に反映している点も特徴的である^{注36}。

^{注35} PLB. *-a > J. -o を見ると、母音の上昇している変化に見える。江 (2002) もそのことをハニ語の下位方言で説明し、母音の上昇がシナ = チベット語の通時的音変化のモデルの一つとしている。しかし江 (2002) は標準的な方言から下位方言へ変化が起こったと考えているようで、各語例を通覧して祖形を再構することはしていない。またチノ語を蓋 (1986) を用いて比較しているが、筆者の採集データとはかなり異なる (江 2002: 352-353)。

^{注36} 徐 (1991) は LB 諸語のいくつかの音変化について論じているが、本論文と関連する部分は鼻音韻尾をもつ韻母の変化である。しかしチノ語の資料が蓋 (1986) によっているため、規則的対応関係が本論文の内容と異なっている。徐 (1991) の提示し

したがって、これらをさらにまとめると、音節構造によってチノ語の韻母の反映の仕方が異なることがわかる。祖形において開音節の場合、高母音と非高母音で反映された母音が祖形と類似しているか、異なっているかが変わる。しかし祖形が閉音節の場合は二方向に分かれる。韻尾が破裂音の場合、*-t 韻尾の場合を除き、祖形の主母音はチノ語で変わっていない。他方、韻尾が鼻音の場合、チノ語ではかなり異なる母音に反映している。

介音*-w-の韻母への影響も注目に値する。*-w-は韻母の変化の起こった後、それらを円唇化したものと考えることができる。PLB において*-w-があるものとは、相互に高さや前後などをほぼ変えることなく、チノ語においてかなり整然と対応している。

3 言語接触から見えるもの

チノ語には漢語から数多くの語が借用されている。また若干ではあるが、傣語との接触により借用された語彙も散見される。本節ではそれら借用元言語 (donar language) が傣語の例を見ていこう。傣語などの資料は王 (1984) に掲載されている語彙による。

3.1 開音節の借用語

チノ語においては PLB に遡れる語彙は、開音節のものについては母音が上昇する現象を先に見たが、傣語からの借用語に関してはそのようなことはない。

- (41) a. a⁵⁵xɔ⁴²(「漢族」; XD. hɔ³; DD. xe⁵)
 b. a⁵⁵la⁴²(「遅い」; XD. la³; DD. la³)

これらから系統関係の離れた言語からの借用語に関してはそのまま母音の同種の母音に反映しているようだ。

3.2 末子音の脱落と保持

これまで見たようにチノ語の固有語には末子音が存在しない。かなり古い時期に傣語から借用した語もチノ語に入った後に脱落しているようだ。

- (42) a. a⁵⁵ja⁴⁴(「難しい」; XD. ja:k⁸; DD. ja:p⁸)
 b. ma⁵⁵pi⁴⁴(「唐辛子」; XD. ma:k⁹phik⁹; DD. ma:k⁹phet⁹)

ている対応セットと共通しているのは、チノ語-ɻ : ビルマ文語-an, チノ語-ɛ : ビルマ文語-am である。徐 (1991) は鼻音韻母の合流、韻尾の脱落、主母音の鼻音化について述べているが、PLB などの祖形再構については言及していない。

これらの例では西雙版納傣語では末子音が-k であることが見てとれる。前節まで見てきたように末子音-k はチノ語では主母音を変えずに脱落する傾向が見られるようだ。

ただしごくまれに漢語同様、鼻音に限って末子音として保持している例も見受けられる^{注37}。

(43) tho⁵⁵lin⁴⁴(「落花生」; XD. tho⁵din¹; DD. tho⁵lin⁶)

3.3 二重母音

次の例は借用元の言語が二重母音の例である。

- (44) a. a⁵⁵ŋai⁴⁴(「やさしい」; XD. ŋa:i⁶; DD. ŋa:i⁶)
 b. vai⁴⁴(「速い」; XD. vai²; DD. xan¹; Zh. va:i⁵)

2の冒頭で述べたように、チノ語の二重母音を持つ語は基本的に漢語または西雙版納傣語からの借用語である^{注38}。(44)の例はいずれも西雙版納傣語からの借

^{注37} (43)の例でチノ語の第2音節の声母が西雙版納傣語と合わず、徳宏傣語(シャン語)と合うのは興味深い。Li (1977: 107)では、他のタイ系諸語と徳宏/泰語で d:l の対応があるとき、Proto-Tai では*ʔd であるとしている。その説をとれば、西雙版納傣語のほうが古い形態を保持し、徳宏傣語は*ʔd>l への変化を被ったと考えるのが妥当であろう。チノ語は有声破裂音を持たないため、徳宏傣語とは別個に、独自の変化を被って l-の音となったと考えられる。

^{注38} 注12で述べたが、チノ語の固有語においても若干の二重母音を持つ語が見られる。

(i)a. khao⁴²「何」

b. lai⁵⁵「～人」

これらの来源については今のところ以下のように考えている。まず (i)a であるが、これは巴卡土語に kha⁵⁵ε⁴⁴「なぜ、どうして」という疑問詞句が存在することに着目する。ε⁴⁴ は名詞について「～の」を表したり、あるいは一部の動詞語根について副詞的な機能を持たせる。すると kha⁵⁵ 自体が何らかの疑問詞と考えたほうがよい。またよく用いられる khao⁴²la⁴²?「何て言ったの?」という文や、同じくよく用いられる kha⁵⁵la⁴²?「何て言ったの?」と平行して考えると、前者は以下のような文が元になって、異分析の結果、kha⁴² という語彙に変化したのであろう。

(ii) *kha⁵⁵ɔ⁴⁴la⁴²? > khao⁴²la⁴²?

何 SFP Q 何 Q

このように khao⁴² という形式に語彙化した後に、以下のような表現が用いられるようになったと考えたい。

(iii) khao⁴²li³³pai³⁵?「何曜日?」

何 週

用の例であるが、(44a)の西雙版納傣語は主母音が長母音であり、(44b)の場合は短母音である。いずれも開音節であるが、借用元の言語の主母音が長母音であろうと短母音であろうと、チノ語では主母音を短母音にした二重母音となっている。注意すべきはチノ語には短母音しか存在しないことである。つまり、チノ語は二重母音という性質を借用元言語から受け継ぎながらも、主母音の短母音性はチノ語独自の音韻体系に則した形で借用しているのである。

3.4 言語接触のまとめ

以上、傣語から借用された若干の語彙について、中国音韻学の用語を借りてまとめてみると、借用元の言語の形式が叙声韻(開音節か末子音が鼻音のもの)ならば、借用後も韻母はそのままであるが、促声韻(末子音が破裂音のもの)ならば、借用語は開音節に合流してしまうことが読みとれる。ただし叙声韻でも傣語において長母音がある語に関しては、チノ語では短母音化することも重要である。

4 おわりに

本論文ではチノ語の音韻史を韻母の変化という面から考察してみた。

ロロ = ビルマ同源語においては、チノ語に他の同系諸語に見られる緊喉母音がない一方、非常に多くの非緊喉母音が存在する。その来源を比較方法によって再構し、変化を考察した。そこには多様で複雑な流れが見えるが、音節構造によって基本的な対応に違いがあることもわかった。また傣語からの接触によってチノ語に導入された語彙は主母音において借用元言語のもつ母音が変わらず反映していることも確認した。

大変多様な対応関係を確認し、その基本的変化について記述することができたが、いまだ多くの不規則的特殊例が存在する。今後は言語接触も含めた形でこれら特殊例の変遷過程における解明を進めていきたい。

次に (i)b であるが、これはよく li⁵⁵ とも言われる。しかし巴卡土語では lai⁵⁵ も同じ程度よく用いられる。チノ語の助数詞は数詞の後ろに置かれる。ここで重要なのは数詞の中に li⁵⁵ 「4」という語があることである。「4人」というときに li³³li⁵⁵ 「4人」(前者が 33 調なのは変調の結果)ということもできるが、より助数詞を強調した形で二重母音化し、li³³lai⁵⁵ 「4人」となったのではないだろうか。このように二重母音化した助数詞 lai⁵⁵ が語彙化して、「3人」や「5人」をいう場合も、sø³³lai⁵⁵ (sø⁵⁵ 「3」)、ŋɔ³³lai⁵⁵ (ŋɔ⁵⁵ 「5」) となったのであろうと考えられる (sø³³, ŋɔ³³ ともに変調が起きている)。

略号・記号表

< 略号 >

Ac.	アチャン語 (阿昌語)	At.	アツイ語 (ツアイワー語、載瓦語)
Bs.	ビス語 (畢蘇語)	C.	チンタウ語 (仙島語)
DD.	ダーホン・ダイ語 (徳宏/傣語)	H.	ハニ語 (哈尼語)
J.	チノ語 (基諾語)	L.	ロロ語 (彝語)
Las.	ラシ語 (勐腊語)	LB.	ロロ=ビルマ系諸語
Lis.	リス語 (傈僳語)	Lw.	ロンウオー語 (マル語、浪速語)
NT	西田 (1955, 1956)	OB.	古代ビルマ語
PB.	ビルマ系祖語	PLw.	Lewis (1968)
PI.	ポラ語 (波拉語)	PLB.	ロロ=ビルマ祖形
SB.	ビルマ口語ヤンゴン方言	WB.	ビルマ文語
WT.	チベット文語	XD.	シーサンパンナ・ダイ語 (西雙版納/傣語)
Zh.	チワン語 (壮語)	ZM	黄 (1992) の資料番号
(巍)	ロロ語巍山方言	(サニ)	ロロ語サニ方言
(南)	ロロ語南華方言	(武)	ロロ語武定方言
(墨)	ハニ語墨江方言		

< 記号 >

Q 疑問助詞 V 緊喉母音 SFP 文末助詞 † 非同源語形

通常の系統的分類において、*slant* 体で書かれているのはロロ系、*sans serif* 体で書かれているのはビルマ系の言語とされていることを示す。

本論文で挙げた資料は、とくに断らない限り、チノ語を筆者の資料から、タイのビス語を Bradley (1988)^{注39}、タイ系諸語を王 (1984) からとっている他は、全て黄 (1992) の資料から得ている。ただし、ビルマ語は適切な語形が黄 (1992) に見当たらない場合、大野 (2000) を参照している。

また特記している場合を除き、ハニ語は緑春方言を、ロロ語は喜徳方言を、アチャン語は隴川方言を扱っている。

^{注39} 徐 (1998) は中国領内のビス語の、Kato (2002) はタイのビス語における最新資料であるが、本論文では基本的に Bradley (1988) を参考にしている。

参考文献

[日本語文献 (50 音順)]

- 大野徹 2000. 『ビルマ(ミャンマー)語辞典』 東京: 大学書林.
- 西義郎 1974. 「ビルマ語の-ac について」『東洋學報』第 56 卷第 1 号: 1-44.
- 西田龍雄 1955. 「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究(1)」『古代學』第四卷第一號: 17-32.
- 1956. 「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究(2)」『古代學』第五卷第一號: 22-40.
- 1964. 「ビルマ語とロロ諸語—その声調体系の比較研究—」『東南アジア研究』第 1 卷第 4 号. 京都: 京都大学東南アジア研究センター.
- 1972. 『緬甸館譯語の研究』 京都: 松香堂.
- 1989. 「チノ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第 2 卷世界言語編(中) pp. 733-740. 東京: 三省堂.
- 2000. 『東アジア諸言語の研究 巨大言語群—シナ・チベット語族の展望』 京都: 京都大学学術出版会.
- 林範彦 2002a. 「チノ語の音韻に関する研究—周辺諸語を見据えて—」 京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 2002b. 「チノ語の介音について—ロロ = ビルマ諸語との比較研究から—」『日本言語学会第 124 回大会 予稿集』 pp. 143-148.
- 2002c. 「ロロ = ビルマ祖語*? が現代チノ語に与えた影響について」『京都大学言語学研究』第 21 号: 311-335. 京都: 京都大学文学部言語学研究室.
- 藪司郎 1982. 『アツィ語基礎語彙集』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

[漢語文献]

- 蓋興之 (Gài Xīngzhī) 1981. 「基諾語概況」『民族語文』1981 年第 1 期.
- 1986. 『基諾語簡誌』 北京: 民族出版社.
- 1987. 「基諾語句子的語氣」『民族語文』1987 年第 2 期.
- 黄布凡 (Huáng Bùfán) 主編 1992. 『藏緬語族語言詞匯』 北京: 中央民族學院出版社.

- 江荻 (Jiāng Dí) 2002. 『漢藏語言演化的歷史音變模型—歷史語言學的理論和方法探索—』 北京: 民族出版社.
- 李永燧 (Lǐ Yǒngsuì) 1992. 「桑孔語初探」『語言研究』1992 年第 1 期.
- 2000. 「共同緬彝語韻類爭論」『民族語文』2000 年第 4 期.
- 李珍華 (Lǐ Zhēnhuá) · 周長楫 (Zhōu Zhǎngjí) 1999. 『漢字古今音表 (修訂本)』 北京: 中華書局.
- 王均 (Wáng Jūn) 等編 1984. 『壯侗語族語言簡誌』 北京: 民族出版社.
- 吳安其 (Wú Ānqí) 2002. 『漢藏語同源研究』 北京: 中央民族大學出版社.
- 徐世璇 (Xú Shìxuán) 1991. 「緬彝語幾種音類的演變」『民族語文』1991 年第 3 期.
- 1998. 『畢蘇語研究』 上海: 上海遠東出版社.
- 雲南省地方誌編纂委員會 (Yúnnánshěngdìfāngzhìbiānzhuǎnwěiyuánhui) 1998. 『雲南省誌』卷五十九 少數民族語言文字誌. 昆明: 雲南人民出版社.

[歐文文獻]

- Bradley, David 1979. *Proto-Loloish*, London: Curzon Press.
- 1983. “The linguistic position of Jinuo”. In: Chu, Chauncy et al eds., *Proceeding of the Fourteenth International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. pp. 21-42. Taipei: Student Book Publishing Co.
- 1988. “Bisu Dialects”. *Languages and History in East Asia: Festschrift for Tatsuo Nishida on the Occasion of his 60th Birthday*. pp. 29-59. Kyoto: Shokado.
- Burling, Robbins 1966. “The addition of final stops in the history of Maru (Tibeto-Burman)”. *Language*, Vol.42, No.3, Journal of the Linguistic Society of America.
- 1967. *Proto Lolo-Burmese*. International Journal of American Linguistics, Volume 33 No.2 Publication forty-three. Bloomington: Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics.
- Duroiselle, Charles. 1919. “The Burmese Face of the Myazedi Inscription at Pagan” *Epigraphia Birmanica*, Vol.1, pt. 1 : 1-46.
- Kato, Takashi (加藤高志) 2002. “Bisu vocabulary”, In: Tasaku Tsunoda ed., *Basic Materials in Minority Languages 2002* (ELPR Publications Series

- B003), Suita: Osaka Gakuin University.
- Lewis, Paul 1968. 'Akha Phonology' *Anthropological Linguistics* Vol.10, No.2: 8-18.
- Li, Fang Kuei (李方桂) 1977. *A Handbook of Comparative Tai*. Hawaii: The University of Hawaii.
- Matisoff, James A. 1972. *The Loloish Tonal Split Revisited*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman—System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction—* Berkeley: University of California Press.
- Nishi, Yoshio (西義郎) 1999. *Four Papers on Burmese—Toward the History of Burmese (the Myanmar language)—*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- Thurgood, Graham 1989. "The Subgrouping of Jino". In David Bradley ed., *Prosodic Analysis and Asian Linguistics: to Honour R.K.Sprigg*, *Pacific Linguistics Series C-No.104*: 251-258. Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.

从韵母来看的基诺语音系演变

林范彦

[提要]

基诺语是云南省西双版纳傣族自治州景洪市基诺族的语言，属于藏缅语族彝缅语群，人口有两万多。分有悠乐方言和补远两个方言。百分之九十的人讲悠乐方言。

本篇论文所涉及的是基诺语的韵母演变。基本上，彝缅语有两个韵母系列：即紧元音和松元音。基诺语虽然属于彝缅语群，但没有紧元音系列，有十二个松元音。笔者从 LB 诸语的比较来考察了基诺元音的来源和演变。

得到了如下结果。

1. 除了古彝缅语（以后为 PLB）*-a 以外，开音节在包括基诺语在内的其他彝缅语里相互对应。
2. PLB 的入声韵母与基诺语，彝语支（尤其是彝语）的主元音音色相同，失去了韵尾。
3. 有鼻音韵尾的 PLB 韵母使基诺语和彝语支的语言有了自己的演变，音色各不相同。
4. 从傣语等语言借用的外来语没有发生元音音色变化，而保持了原来的与韵腹音色。

(受理日 2003 年 9 月 29 日 最終原稿受理日 2003 年 12 月 22 日)